

しんぱん

しどうようもんしゅう

新版 指導要文集

だいいつしよう

しんじん

きほん

第一章 信心の基本

こうせんるふ

広宣流布

かくのごとく國土舌れて後に上行等の聖人出現し、
本門の三つの法門これを建立し、一四天四海一同に
妙法蓮華經の広宣流布疑いなきものか。

(008 法華取要抄)

広宣流布 159 ページー6行

か びやくほうおんもつ つぎ ほけきょう かんじん
ただし、彼の白法隱没の次には、法華經の肝心たる
なんみょうほうれんげきょう だいびやくほう
南無妙法蓮華經の大白法の、一闇浮提の内八万の国あ
くにぐに はちまん おう おうおう しんか
り、その国々に八万の王あり、王々ごとに臣下ならびに
ばんみん いちえんぶだい うちはちまん くに
万民までも、今日本國に弥陀称名を四衆の口々に唱うる
いまいほんこく み だしうみよう ししゅ くちぐち とな
こうせんる ふ たも
がごとく広宣流布せさせ給うべきなり。

（009 摺時抄

こうせんる ふ
広宣流布 164 ページー4行

こくしゅとう

諫

もち

りんごく

かれがれ

國主等そのいさめを用いざば、隣國におおせつけて彼々の
くにぐに あくおう あくびくとう 責
だいとうじょう いちえんぶだい お

ぜんだいみもん

国々の魔王・悪比丘等をせめらるるならば、前代未聞の
だいとうじょう いちえんぶだい お

とき にちがつ て

大鬪諍、一闇浮提に起くるべし。その時、日月の照らす

ところの四天下の一切衆生、あるいは国をおしみ、ある

くに

惜

み

いっさい

ぶつぼさつ

祈

掛

いは身をおしむゆえに、一切の仏菩薩にいのりをかくとも

験

憎

ひと

しょうそう

しん

しるしなくば、彼のにくみつる一りの小僧を信じて、

むりよう

だいそうとう

はちまん

だいおうとう

いっさい

ばんみん

みな

こうべ

ち

無量の大僧等・八万の大王等・一切の万民、皆、頭を地

付

たなごころ

あ

いちどう

なんみょうほうれんげきょう

唱

につけ 掌 を合わせて、一同に南無妙法蓮華経ととなう
べし。

009
撰時抄
せんじしょう

廣宣流布
こうせんるふ
165
ページー4行
(

これをもつて案するに、大集經の白法隱没の時に次い
で、法華經の大白法の日本國ならびに一閣浮提に廣宣
流布せんことも疑うべからざるか。

(009 撰時抄)

廣宣流布 173 ページー3行

ほとけ

めつご

かしよう

あなん

めみよう

りゅうじゅ

むじやく

てんじん

ないし

仏の滅後に迦葉・阿難・馬鳴・龍樹・無著・天親、乃至

めみよう

りゅうじゅ

むじやく

てんじん

ないし

てんだい

でんぎょう

ぐつう

天台・伝教のいまだ弘通しましまさぬ最大の深秘の

は

しようほう

きようもん

おもて

げんぜん

じんぱう

いま

まっぽう

は

正法、経文の面に現前なり。この深法、今、末法の始

め五の五百歳に一閻浮提に広宣流布すべきや

(009 撰時抄

こうせんるふ

こうせんるふ

広宣流布 184 ページー 3 行)

にほんないしかんど がっし いちえんぶだい ひと うち むち
日本乃至漢土・月氏・一闇浮提に、人^ノとに有智・無智を
嫌 いちどう たじ 捨 なんみょうほうれんげきょう とな
きらわず一同に他事をすべてて南無妙法蓮華経と唱うべし。
このこといまだひろまらず。一闇浮提の内に仏の滅後にせんにひやくにじゅうごねん
二千一百二十五年が間、一人も唱えず。日蓮一人、
南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経等と声もおしまず唱うる
なり。

(010 報恩抄 ほうおんしょう)

広宣流布 こうせんるふ 261 ページー4行

にほん ちゅうごく

日本および中国、インド、さらに全世界において、だれかれとな

ぜんせかい

ぶつぼう りかい

く仏法を理解しているいないにかかわりなく、みんないつしょに、他

のことをさしあいて南無妙法蓮華経と唱えるべきです。この仏法

なんみょうほうれんげきょう とな ぶつぼう

は、いまだ弘まつていません。全世界のなかで、釈尊がなくなつて

ひろ

ぜんせかい

しゃくそん

から二千二百二十五年の間、一人も唱えなかつた題目です。ただ

だいもく

にせんにひやくにじゅうごねん 「あいだ ひとり とな

にちれんひとり

なんみょうほうれんげきょう

なんみょうほうれんげきょう

こえ お

日蓮一人が、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経と、声も惜しまず

とな ぶつぼう

に唱えた仏法なのです。

た

ほつけ しゃくぶく ごんもん り は
「法華の折伏は權門の理を破す」の金言なれば、終に
ごんきょう ごんもん やから いちにん
權教・權門の輩を一人もなくせめおとして法王の家人と
てんかばんみん しょじょういちぶつじょう な
なし、天下万民、諸乗一仏乗と成つて妙法独り繁昌せ
とき ばんみんいちどう
ん時、万民一同に南無妙法蓮華経と唱え奉らば、吹く風
えだ 鳴 ほうおう けにん
あめつちくれ くだ
よ ぎ のう よ
枝をならさず、雨壊を碎かず、代は羲・農の世となり
こんじょう ふしよう さいなん はら
て、今生には不祥の災難を払い、長生の術を得、人法
とも ふろう ふし ことわりあらわ
共に不老不死の理顕れん時を、各々御覽ぜよ。「現世
あんのん しょうもん うたが
安穩」の証文、疑いあるべからざるものなり。
によせつしゅぎょうしよう

こうせんるふ
広宣流布 600 ページー17行

ほつけ しゃくぶく ごんもん り は
「法華の折伏は、權門の理を破す」という天台大師の言葉がありますから、そのとおり最後には、權教を信じている人びとを、ひとりのこ ただ ぶっぽう め
一人残らず正しい仏法に目ざめさせて 仏の味方にし、世の中の人 しようと うせんるふ とき
がみな正法を信じ、妙法のみが栄える広宣流布の時がきて、すべての人が南無妙法蓮華経を唱えていくならば、風は穏やかに吹ふ
き、降る雨も洪水などを起こさず、昔の中国の伏羲・神農のじだい
時代のような理想社会となり、人びとは災難にうちまかされることのない人生を送り、生命をまつとうして長生きすることができるよ
じんせい おく せいめい
ながい

うになります。人も法もともに、永遠に栄えるという道理が実現するそのようなときを、みんなで見てご覧なさい。その時こそ「現世は
あんのん
きょうもん ことば じじつ
うたが
げんせ

安稳である」という経文の言葉が事実となるのは疑いのないこと
です。

しみさんぎょうとう じやしゅう す じつだいじょう ほけきょう き
四味三教等の邪執を捨てて実大乗の法華經に帰せば、
しょてんぜんじん じゅせんがいとう ぼさつ ほつけ ぎょうじや しゅご
諸天善神ならびに地涌千界等の菩薩、法華の行者を守護
ひと しゅご ちから え
せん。この人は、守護の力を得て、本門の本尊・
みょうほうれんげきょう ごじ ほんもん ほんぞん
妙法蓮華經の五字をもつて閻浮提に広宣流布せしめん
えんぶだい こうせんる ふ
か。

れい いおんのうぶつ ぞうほう とき ふきょうぼさつ がじんきょう われ
例せば、威音王仏の像法の時、不輕菩薩「我深敬（我は
ふか うやま とう にじゅうしじ か ど こうせんる ふ
深く敬う）等の二十四字をもつて彼の土に広宣流布し、
いっこう じょうぼくとう だいなん まね
一国の杖木等の大難を招きしがごとし。

けんぶつみらいき

広宣流布 こうせんるふ
608 ページー 16行 ()

月は西より出でて 東を照らし、日は東より出でて 西を照らす。仏法もまたもつてかくのごとし。正像には西より 東に向かい、末法には東より西に往く。

(037 顕仏未來記)

広宣流布 610 ページー 5 行

月はその出方は西から 東へ移り、太陽は 東から出で西の方角へ照らしていきます。仏法もこれと同じで、正法・像法時代には、インド、中國、朝鮮、日本と西から 東へ仏教が伝わつてきましたが、末法には、逆に南無妙法蓮華経の大仏法が、東の

にほん しゅつげん
日本に出現して、

にし つた
西に伝わり、

ぜんせかい ひろ
全世界へ広まつていいくのです。

と い ぶつきすで なんじ みらいき
問うて曰わく、仏記既にかくの」とし。汝が未来記いか
ん。

こた い ぶつき じゅん かんが すで のち
答えて曰わく、仏記に順じてこれを勘うるに、既に後
の五百歳の始めに相当たれり。仏法必ず東土の日本より
い 出すべきなり。

（037 顯仏未來記 けんぶつみらいき）

こうせんるふ
広宣流布 611 ページー1行

されば、この經を受持して南無妙法蓮華經と唱え奉る
べしと見えたり。

薬王品には「後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して、
断絶せしむることなけん」と説き給い、天台大師は「後の
五百歳、遠く妙道に沾わん」と釈し、妙楽大師は「し
ばらく大教の流行すべき時に拠る」と釈して、後の
五百歳の間に法華經弘まつて、その後は、閻浮提の内に
絶え失せることあるべからずと見えたり。

広宣流布 こうせんるふ
693 ページ一7行

てんじくこく がっしこく もう ほとけ しゅつげん たも な
天竺国をば月氏国と申す、仏の出現し給うべき名なり。
ふそくこく にほんこく もう しょうにんい たま つき
扶桑国をば日本国と申す、あに聖人出で給わざらん。月
にし ひがし む がっし ぶっぽう ひがし なが そう
は西より東に向かえり。月氏の仏法の東へ流るべき相な
り。日は東より出ず。日本の仏法の月氏へかえるべき
ひ つき ひかり い にほん ぶっぽう がっし なが
瑞相なり。月は光明あきらかならず。在世はただ八年な
ずいそう こうみよう つき まさ ざいせ はちねん
り。日は光明、月に勝れり。五の五百歳の長き闇を照ら
すべき瑞相なり。

(050 諫曉八幡抄)

かんぎょうはちまんしょう

こうせんる ふ
広宣流布 747 ページー11行)

てんじくこく

がつしこく

ほとけ しゅつげん

天竺国（インド）を月氏国といいますが、これは、仏が出現す

くに な

ふそうこく にほんこく

しょうにん

べき国の名です。扶桑国を日本国といいます。どうして聖人が

しゅつげん

つき でかた にし ひがし

む

出現しないわけがありましょうか。月は出方が西から東へと向か

ぶつぽう とうほう るふ

います。それはインドの仏法が東方へ流布していくさまをあらわし

たいよう ひがし で

にほん ぶつぽう

ています。太陽は東から出ます。これは、日本の仏法がインドおよ

ぜんせかい

ずいそう

つき ひかり あか

び全世界にかえつていく瑞相（しるし）なのです。月は光が明るく

ほけきよう

しゃくそんざいせ はちねんかん

て

ないようすに法華経はただ釈尊在世の八年間を照らしただけでした。

たいよう

かがや

つき すぐ

ごごひやくさい

まっぽうまんねん

太陽の輝きは月に勝れており、これは五五百歳、末法万年の

みらいえいごう

やみ て

ずいそう

未来永劫にわたつて闇を照らしていく瑞相です。

ひつきょう

こうせんるふ

じゅういちじょう

「畢竟」とは広宣流布なり。「住一乘」とは、

なんみょうほうれんげきょう
いつぼうじゅう

南無妙法蓮華経の一法に住すべきものなり。

(095 御義口伝

こうせんるふ

広宣流布 1074 ページー7行

ほけきょう

えんぶだい

ぎょう

ふげんぼさつ

いじん

ちから
よ

この法華経を閻浮提に行することは、普賢菩薩の威神の力に依るなり。

べきなり

この経の広宣流布することは、普賢菩薩の守護なる

(095 御義口伝

広宣流布 1085 ページー2行

この法華経を全世界に行していくということは、普賢菩薩の力によるのです。この経(三大秘宝の南無妙法蓮華経)が広宣流布するには、普賢菩薩の守護の力によるのです。

ほけきょう ゼンセカイ ギょう
きょう さんだいひほう なんみょうほうれんげきょう
ふげんぼさつ しゅご ちから

つい
終には 一闇浮提に広宣流布せんこと 一定なるべし

(096 御講聞書)

いちじょう
1135

こうせんるふ
広宣流布 ページー5行

おんこうききがき

にちれん

ふしおうふじょう

みょうほうれんげきょう

たとい、日蓮、死生不定たりといえども、妙法蓮華経の
五字の流布は疑いなきものか。

(125 土木殿御返事 (経文符合の事))

広宣流布 1298 ページー10行

いま　にちれん　とき　かん　ほうもんこうせんる　ふ
今、日蓮が時に感じて、この法門広宣流布するなり。

さんだいひほうほうじょうじ　さんだいひほうしょう
三大秘法稟承事（三大秘法抄）

（160　三大秘法稟承事（三大秘法抄））

こうせんる　ふ
広宣流布　1388　ページー8　行

にちれん

とき

かん

さんだいひほう

こうせんる　ふ

いま日蓮がその時であると感じて、この三大秘宝を広宣流布する

のです。

正像一千には西より 東に流る。暮月の西空より始まるが
ごとし。末法五百には 東より西に入る。朝日の東天より
出づるに似たり。

(162 曾谷入道殿許御書

そやにゅうどうどのもとごしよ

1407 ページー16行
広宣流布

こうせんるふ

春

の

せんり

草

満

そうちら

少

はるの野の千里ばかりにくさのみちて 候わんに、すこし
まめ
草
放
ひ
きの豆ばかりの火をくさひとつにはなちたれば、一時に
むりようむへん
ひ
無量無辺の火となる。

(249 桟敷女房御返事 (無量無辺の功德の事)

さじきのにようぼうごへんじ
むりようむへん
くどく
こと
こうせんるふ
1704 ページー16行)

にほんこく なか いちにん なんみょうほうれんげきよう とな
日本國の中にただ一人、南無妙法蓮華経と唱えたり。これ
しゅみせん はじ いちじん たいかい はじ いちろ ににん
は須弥山の始めの一塵、大海の始めの一露なり。二人・
さんいん じゅうにん ひやくにん いつこく にこく ろくじゅうろくかこく
三人・十人・百人、一国・二国、六十六箇国、すでに島
ふた およ いま ぼう ひとびと とな たも
二つにも及びぬらん。今は謗ぜし人々も唱え給うらん。ま
かみいちらん しもばんみん いた
た上一人より下万民に至るまで、法華経の神力品のごと
いちどう なんみょうほうれんげきよう とな たも
く、一同に南無妙法蓮華経と唱え給うこともやあらんずら
ん。

(251 妙密上人御消息

みょうみつしょうにんごしおうそく

こうせんる ふ

広宣流布 1711 ページー12行

（日蓮は）日本国でただ一人、南無妙法蓮華経と題目を唱えた
のです。このことは須弥山という大きな山をつくつてある最初の一
塵であり、大きな海の最初の一滴の水と同じです。一人、三人、
十人、百人、一国、二国、六十六か国（日本中）まで弘ま
り、壱岐、対馬にまでおよんでいるであります。今では日蓮を
謗じていた人たちも題目を唱えているでしよう。また日本の国の上
は最高権力者から下は庶民にいたるあらゆる人びとが、法華経
は神力品で説かれているように、かならず一同に声を合わせて
南無妙法蓮華経と唱えるときがくるであります。

にちれんいちにん

なんみょうほうれんげきよう とな

ににん

日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱えしが、二人・

さんいん ひゃくにん しだい とな 伝

みらい

三人・百人と次第に唱えつたうるなり。未来もまたしか

じ ゆ ぎ

るべし。これ、あに地涌の義にあらずや。あまつさえ、

こうせんる ふ とき にほんいちどう なんみょうほうれんげきよう とな

とな

広宣流布の時は、日本一同に南無妙法蓮華経と唱えんこと

だいち まと

は、大地を的とするなるべし。

（280 諸法実相抄

しょほうじつそうじょう

こうせんる ふ

広宣流布 1791 ページー10行

さいしょ にちれん

だいしょにん

ひとり

なんみょうほうれんげきよう とな

とな

最初は日蓮（大聖人）ただ一人が、南無妙法蓮華経と唱えて

ふたり

さんいん ひゃくにん

ひやくにん

いたのが、一人、三人、百人と、しだいに唱え伝わってきたので

みらい

じゅ

す。未来もまた、そうなることでしょう。これこそ「地涌」ということではないでしょうか。そのうえ、広宣流布の時には、日本国中がそろつて南無妙法蓮華経と唱えることは、大地を的にして弓を射ればかならず当たるよう絶対に間違いないことなのです。

あ

ぜつたい

まちが

なんみょうほうれんげきよう とな
だいち まと ゆみ い

とき

とき

まと

ゆみ

い

こうせんるふ とき んほんこくじゅう

だいあく

だいぜん

きた

ずいそう

いちえんぶだい 打

乱

大惡は大善の来るべき瑞相なり。一閣浮提うちみだすならば、「閣浮提内、広令流布（閣浮提の内に、広く流布せしむ）」は、よも疑い候わじ。

（363 減劫御書

げんこうごしょ

（こうせんるふ
1969 ページー6行）

いんが

理

はな

み

そもそも因果のことわりは華と果とのごとし。

せんり

の
か

くさ

はたるび

ひ

ひと

つ

千里の野の枯れたる草に螢火のごとくなる火を一つ付け

しゅゆ

いつそうにそう
じゅう
ひやく
せん

まんそう
付

まんそう
渡

ぬれば、須臾に一草二草、十・百・千・万草につきわた

燃

じつちよう
じつちよう

そうもく
いちじ

焼

尽

りゆう

りてもゆれば、十町二十町の草木一時にやけつきぬ。竜

い
てん
のぼ

さんせん
せかい

あめ

は一滴の水を手に入れて天に昇りぬれば、三千世界に雨を

降

ふらし候。

そらうらう

(399 新池殿御消息

にいけどのごしようそく

広宣流布

2056

ページ 9 行

(422) 大果報御書 だいかほうごしょ

広宣流布 こうせんるふ
2144 ページー14行)

2144
ヘー
ジー
14
行(

だいじ しようすい だいあく 起

だいぜん 来

だいぜん 来

大事には小瑞なし。大惡おこれば大善きたる。すでに、
大謗法、國にあり。大正法、必ずひろまるべし。

(423 大惡大善御書)

広宣流布 2145 ページー 6 行

おお

お

ちい

ぜんちよう

す

だいあく

が起こればかならず大善はやつてくるのです。すでに大謗法が國に
充満しているのですから、次は大正法がかならず弘まつていくに
が起なことが起きたときには小さな前兆では済みません。大惡

じゅうまん

つぎ だいしようほう

ひろ

ちがいありません。